

平成二十二年春の展示会報告

平成二十二年春の特別展（四月三日（土）～四月二十二日（木））は、

『旗本御家人 幕臣たちの実像』と題し、当館が所蔵する古書古文書及び公文書の中から、江戸幕府の旗本御家人（幕臣）が人生の節目で作成した文書を展示してその実像に迫ると共に、明治以降も各分野で活躍した彼らの多彩な業績を紹介しました。展示資料は全五十八点。うち主な展示資料は左の通りです。

【人生の節目】

丈夫届（じょうぶとどけ）（多聞櫓文書 たもんやぐらもんじょ）

江戸時代の武士の世界では、当主が十七歳未満で死亡すると家の存続が認められませんでしたが（家の断絶）。このため大名も旗本も、相続する可能性のある男子の年齢を実際より高く幕府に届けることが慣習化しました。「出生のときは虚弱で育ちそうになかったので出生届を出しませんでしたが、丈夫に育ったので、あらためて届けます」というのが「丈夫届」。この届によって男子の年齢を実際より高くし、相続後死亡しても十七歳以上になるよう年齢を調整したのです。展示資料は、文久三年（一八六三）に提出された佐藤誠一郎の男子内蔵吉の「丈夫届」。

幕臣の出勤簿（多聞櫓文書）

文久四年（一八六四）の腰物方（將軍家の刀剣を管理する役）の出勤簿（『御審判形帳』）。当番で出勤した日は、出勤簿にそれぞれ花押を記し、

病欠の日は出勤簿に「煩」（わづらい）と書かれています。全一冊。

幕臣の結婚事情（縁組願之留 えんぐみねがいのとめ）

『縁組願之留』は、文久元年（一八六一）から三年までの間に幕臣から提出された縁組願いを記録したものです。この資料から、当時の幕臣の結婚において、一方が「再縁」（再婚）だったり、再婚同士だったケースが意外に多かったことがうかがえます。多聞櫓旧蔵。全一冊。

急養子願（きゅうようしねがい）（多聞櫓文書）

跡継ぎの男子がいままま当主が死亡すると、その家は断絶というのが武士の相続法。しかしそれでは断絶になる家が絶えないと、やがて当主が死の寸前（末期）に養子を願い出ることが許されるようになります。いわゆる末期養子（急養子）の制度で、実際には当主が亡くなっていても、生きていて偽って養子を願うケースが少なくありませんでした。展示資料は、有馬修理の「急養子願」と松平熊之丞の「急智養子願」。

【異才の幕臣たち】

清俗紀聞（しんぞくきぶん）

長崎奉行に就任した中川忠英は、配下の近藤重蔵らを清国商人のもとに派遣して、中国の風俗習慣や日常生活について聞き取り調査を行いました。その成果が『清俗紀聞』で、寛政十一年（一七九九）に出版されました。

展示資料は、幕府への献上本で、初版本に手書きで彩色が施されています。全六冊。

金銀図録（きんぎんずらく）

わが国古来の金銀貨幣の図と解説を載せた金銀貨幣図説。豊臣氏や徳川幕府が鋳造した金銀貨幣のほか、日本各地で造られたより古い貨幣など五百五十品を収録し、「附言」として和漢貨幣沿革史も添えられています。文化七年（一八一〇）刊。著者の近藤重蔵は、書物奉行を務めた旗本で、多彩で精力的な活動で知られる知識人です。昌平坂学問所旧蔵。全七冊。

古今要覧稿（ここんようらんこう）

幕臣で書家、国学者としても知られる屋代弘賢が中心になって編集した類書（分類体の百科全書）。天保十三年（一八四二）までに五百六十冊が幕府に進呈されましたが、同十五年の江戸城本丸の火災ですべて焼失。展示資料は、明治十三年（一八八〇）に内務省が購入した屋代の旧蔵本です。全百七十八冊。

本草図録（ほんぞうずらく）

長年にわたって植物を研究した幕臣、岩崎灌園が著した植物図鑑。各地を踏査し写生した二千種もの植物図に解説を添えたもので、わが国で最初の本格的な植物図鑑と言われています。文政十一年（一八二八）に九十六巻（九十二冊）が完成。うち五巻から六巻までの六冊が文政十三年に出版されました。展示資料は自筆の写本で、全七十二冊。

満文強解（まんぶんきょうかい）

天文方でのちに書物奉行も務めた高橋景保が、文化元年（一八〇四）に通商を求めて長崎に来航したロシア使節レザノフがもたらした満州語で書かれた国書を翻訳したもの。当時わが国に満州語を解読できる者は無く、幕府に翻訳を命じられた高橋は、中国で出版された満州語の辞書を手掛かりに、文化七年に翻訳を完成させました。昌平坂学問所旧蔵。全一冊。

駿国雑志（すんこくざっし）

駿河国（静岡県中部）の地誌。文化十四年（一八一七）に駿府加番を拝命した旗本の阿部正信が、在任中に資料収集や現地調査に着手。江戸に戻ってから調査研究を重ねて、天保十四年（一八四三）に全五十巻を完成させました。内務省旧蔵。全七十八冊。

ロシア使節との交渉（記録材料）

嘉永六年（一八五三）から翌安政元年にかけて、長崎に来航したロシアの使節プチャーチンとの間で行われた会談の記録。ロシア側と交渉に当たった川路聖謨（勘定奉行）の老練な対応が克明に記されています。

「記録材料」は、太政官および内閣記録局（課）の編纂事務の材料に用いられた明治政府の公文書。

はつか艸（はつかぐさ）

「はつか艸」は、大屋某を中心とする仲間が、毎月二十日の寄合の際に出た話題を書きとめた書。延享元年（一七四四）に町奉行になり、名奉行と讃えられた能勢頼一の興味深い逸事も記されています。昌平坂学問所旧蔵。全一冊。

武備目録(ぶびまつげ)

『武備目録』は、鵜飼平矩の草稿を松宮俊英が校訂し、元文四年(一七三九)に成った書。いまさら聞けない非常時の武士の作法等が具体的な例を挙げて述べられています。切腹の項では、江戸初期の「旗本奴」を代表する水野十郎左衛門(一六六四年没)の特異な切腹の場面も紹介されています。全二冊。

【幕末から明治へ】

自由之理(じゆうのこわり)

幕府の儒者で英国留学も経験した中村正直(号は敬宇)が、英国人J・S・ミルの『自由論』を翻訳した書。明治五年(一八七二)に刊行され、前年刊行されベストセラーとなった『西国立志編』と共に中村の代表的な業績となりました。外務省旧蔵。全六冊。

魚類塩蔵品輸出の請願

幕府海軍の充実に努め、また勘定奉行として財源の確保に尽力した小野友五郎は、維新後、わが国の製塩技術の改良に情熱を注ぎました。試行錯誤の末に良質の塩が得られたと確信した小野が、明治二十八年(一八九五)に政府に提出したのが「魚類塩蔵品輸出の請願」。大半が肥料とされている魚類を、塩蔵して積極的に海外に輸出すべきであると述べています。

明治新撰泉譜(めいじしんせんせんぷ)

奥儒者や外国奉行などを務めた旗本の成島柳北が、明治になって編集した古銭図鑑。自身のコレクションをはじめ、当時の古銭コレクターが所蔵する日本や中国・朝鮮等の古銭の逸品が掲載されています。明治十五年

(一八八二)から二十二年刊。全三冊。

【「武」の世界】

甲冑着用指南(かっちゅうちやくようしなん)

泰平の世に慣れ、甲冑の着方もよく知らない武士の間で甲冑の需要が高まった嘉永六年(一八五三)ペリーの浦賀来航の年に、緊急出版された書。甲冑着用の手順などが平易に記されています。昌平坂学問所旧蔵。全一冊。

右のほか以下の資料を展示しました。

「誕生・出生届(官府御沙汰略記)」「素読吟味(多聞櫓文書)」「学問吟味(多聞櫓文書)」「学問吟味の試験問題(多聞櫓文書)」「考試備用典籍」「水泳上覧(弘化雜記)」「水泳所開設の願書(多聞櫓文書)」「就職活動(蚕の焼藻の記)」「当番のやりくり(多聞櫓文書)」「持参金問題(政談)」「足袋願・杖願(多聞櫓文書)」「病欠届(多聞櫓文書)」「看病休暇(多聞櫓文書)」「老衰御褒美(老衰御褒美之留)」「老衰御褒美願(多聞櫓文書)」「甲府日記」「荷蘭馬具図」「不尽の煙」「亜欧語鼎」「蛮蕪子」「視聴草」「外国奉行の俸給を辞退(多聞櫓文書)」「流芳録」「英国留学生に手当の先払いを願う(多聞櫓文書)」「オランダの堤防調査報告(単行書)」「政治家必携各国年鑑」「小野使節団の渡米(多聞櫓文書)」「冗費の削減を指示(多聞櫓文書)」「緑綬褒章を下賜される(公文雜纂)」「歩兵頭並大鳥圭介明細短冊(多聞櫓文書)」「昇進の理由(多聞櫓文書)」「明治七年大鳥圭介報文」「大鳥圭介建言(岩倉具視関係文書)」「歩兵頭並・成島柳北の俸禄(多聞櫓文書)」「騎兵の軍服を新調したい旨(多聞櫓文書)」「柳橋新誌」「柳北奇文」「鎧毛図彙」「旗幟図鑑」「探甲図歌」「洋外礮具全図」